

# 地域社会における近代教育と 生業への参加過程

## 戦前の宮城県気仙沼市の事例から

The Process of Participation in Schooling and Livelihood  
at Local Communities : A Case Study of Kesennuma City,  
Miyagi Prefecture before the World War II

川村清志

KAWAMURA Kiyoshi

- ① 問題の所在と「尾形栄一日記」について
- ② 尋常高等小学校から公民学校への軌跡
- ③ 農作業への従事
- ④ 漁業への参加と展開
- ⑤ 子供から大人へ

### 【論文要旨】

本論は、家制度や同族の繋がりが残る村落社会の慣習と、学校や軍隊を含む近代的な諸制度とのせめぎあいのなかで、個々人がどのように社会化していくのかを問い直す。そのために近代社会における子供の成立とそのメカニズムを問う視点と、村落社会における子供の社会化やその象徴的な位置づけを探る民俗学的な視点を併用しつつ、昭和初期の東北の三陸地方で得られた事例の検証を行いたい。

以下では、ローカルな民俗文化と近代社会の諸制度を対立的に捉えるのではなく、両者が相互に影響を与えつつ、生きられた生活世界を描き直したい。検証する日記資料は、宮城県気仙沼市内の小々汐集落で2011年の東日本大震災後の文化財レスキューを通じて見出されたものである。日記資料は1932(昭和7)年と33年(昭和8)に、当時、10代半ばの少年によって記されたものである。この資料の分析は、約一世紀前の気仙沼の地域文化の推移を読み解くことにもなり、震災によって失われた文化の多様性を析出し、現代の地域社会へ送り返す作業にもリンクしている。

本論の構成は以下の通りである。1節で日記の著者である尾形栄一氏と彼が残した日記の概要を説明する。2節では栄一氏が記す学校での経験を日記より抽出し、就学状況とその特質について整理する。3節では日記に記された尾形家の農業に関する記述の検証を行う。4節では、同じく尾形家の家業の柱であった漁業への携わり方について検証する。以上の点を踏まえて最後の5節では、栄一氏が、教育制度を通じて確実に近代の日本社会へと編入されていく一方で、彼自身の日常生活を律し、新たに形作っていくのは、地域社会で営まれてきた生業における社会関係や技能の習得状況による変化であったことを明らかにする。

【キーワード】 日記, 子供, 社会化, 学校教育, 生業, 漁業

## ①……………問題の所在と「尾形栄一日記」について

本論は、家制度や同族の繋がりが残る村落社会の慣習と、学校や軍隊を含む近代的な諸制度とのせめぎあいのなかで、個々人がどのように社会化していくのかを問い直していく。

子供という存在が、近代以後、制度的に作り出された存在である、という視点はフィリップ・アリエスの議論以後、様々に変奏されつつ主題化されてきた〔アリエス1980〕。「子供」は近代的な核家族のなかで庇護され、成長を促すべき存在として見出される。両親は家庭のなかで、他に置き換えのきかない個人として、情緒的な感情と紐帯をもって彼らに接するようになる。他方で彼らは年齢に応じて学校という集約的な空間で、均質な教育を受容する者として訓練される。こうして子供という存在は、近代家族と学校という制度的布置の両面で大人から区分され、個人としての自我を育みつつ、国家レベルで平準化された知識を獲得することを求められる存在となっていった。

対して日本民俗学では、村落社会における伝統的な社会組織や通過儀礼を通して子供が社会的な立場を変えていく過程を捕捉しようとしてきた。例えば柳田國男は、民俗社会における子供の位相を「信仰」と「群」による教育という視点から理解しようとした〔柳田1990, 1993〕。前者では子供の遊戯に古い時代の儀礼や信仰の痕跡を見ようとしたり、幼少期の子供への神性の残存を検証したりしてきた。この視座は、一部の民俗学や児童文化論などに影響を与えることになるが〔本田1982, 飯島1991〕、やや進化主義的な仮説に依拠しており、実証的な立場からは留保すべき点が多い<sup>(1)</sup>。対して後者の視座は、民俗社会における子供の成長には、家族だけでなく社会の多くの者が関与していたことが指摘されている。子供は「群の教育」によって導かれる存在であり、それら伝統的な大人への階梯は、近代教育の導入によって寸断されてしまったと捉えられる〔福田1991〕。

以下では、ローカルな民俗文化と近代社会の制度を対立的に捉えるのではなく、両者が相互に影響を与えつつ生きられた生活世界を描き直したい。そのために宮城県気仙沼市内の昭和初期に記された日記資料を検証する。この資料は、市内の小々汐地区で2011年の東日本大震災後の文化財レスキューを通じて見出されたものである。資料の分析は、約一世紀前の気仙沼の地域文化の推移を読み解くことにもなるだろう。そこでの知見は、震災によって失われたかつての民俗文化の多様性を析出し、現代の地域社会へ送り返す作業にリンクしている（図1参照）。

本論が検証する「尾形栄一日記」（以後「日記」）は、宮城県気仙沼市小々汐地区での文化財レスキューの過程で回収され、安定化処置が施された資料の整理過程で見出された。東日本大震災が発災した翌年、2012年の春のことである。

小々汐の尾形家（オオイ）の被災資料の一つであり、その筆者は現当主、尾形健氏のオジにあたる尾形栄一氏であることがわかった。栄一氏は、健氏の父、忠行氏の弟にあたる。忠行氏、栄一氏たちの父、良蔵氏は不惑を待たずして早逝している。日記が記された当時は、栄一氏たちの母親が忙しく働いていた様子が確認できる。

本論が対象とする日記は1932（昭和7）年と1933（昭和8）年の2冊分であった。内容的には高等小学校の最終年度にあたる1932年とその翌年の生活が、ほぼ毎日記録されている。横長の藁半紙の帳面に記されており、特に決まった形式はない。右開きの帳面に新暦の月日順に記されてい



図1 現在の気仙沼市域図

る。1932年は元旦より順番に167頁にわたって日記が記され、最終頁に住所が記される。1933年は、125頁の記載があるが、年の終わりまで記述は続かず、12月2日で記述は途切れている（以下では基本的に西暦で記述し、1932年を32年、1933年を33年と表記していく）。それでもこの日記には、当時10代半ばだった栄一氏が経験した尾形家の生業や年中行事、人生儀礼や民俗信仰、さらにそれらの様々な営みに関わる家族や親族たちの様子が簡潔に記録されていた。

日記の整理過程とそこで生じた課題については、以前に論じたことがある〔川村2019〕。また、テキストの具体的な分析として、日記内に記された年中行事の分析を行ったこともある〔川村・葉山2019〕。その結果、行事の伝承について戦前と現在ではいくつかの切断面があり、その内容にも違いがあることがわかってきた。また、日記が書かれた当時においても、行事の典拠となる日時に旧暦と新暦が錯綜し、そこに学校行事などの明治以後のイベントが定着しつつあることも確認できた。

次節からは以下のような構成で議論を行う。2節では栄一氏が記す学校での経験を日記より抽出し、就学状況とその特質について整理する。3節では、日記に記された尾形家の農業に関わる記述を検討し、4節では同じく尾形家の家業の柱であった漁業への携わり方について検証する。以上の点を踏まえて最後の5節では、栄一氏が、教育制度を通じて近代の日本社会へと編入されていく一方で、彼自身の日常生活を律し、新たに形作っていくのは、地域社会で営まれてきた生業における社会関係や技能の習得による変化であったことを明らかにする。

## ②……………尋常高等小学校から公民学校への軌跡

日記は1932（昭和7）年の元旦から始まると紹介した。この時、栄一氏は尋常高等小学校の2年生であった。3学期が始まると毎日のように学校の様子が記される。通常の授業は5時間が多い。主要な科目についての記述は少ないが、予習についての記載から「国史、綴方、算数」などの言葉がみえる。学校での記録としては、友人たちとの休憩時間の遊びや「体育」の時間のスポーツ関連の記事が目立つ。体育の時間には「方形ドッチボール」や「ピンポン」がよく登場する。ピンポンについては、休み時間にも友人たちと楽しむ様子が記される。

遊戯はスポーツだけではない。複数回、『少年倶楽部』を借りたといった記載が見られる。『少年世界』という雑誌名も登場し、それらを友人から借りたり、時には購入したりして、通読していたようである。ここで詳しく検証することはできないが、出版雑誌に掲載された種々の物語も、この時期の子供たちのメンタリティに大きな影響を与えたと考えられる。

日記が書かれた時期を想起させる記述もみられる。雪が降った道がぬかって登校に苦労した日もある。学校ではストーブが点けられていたが、「朝は大へんにつめたかった」（1月28日）日もあった。この頃、教室には「暖飯器」というものが設置された。文字通り、弁当を温めるためのものだが、どのような形状だったかまでは記述がない。それでも昼食時に「べんとうはほや〜となって居た」らしい。

学校での特徴的な行事も日記に残されている。2月22日は「旧の十七日で學藝會です」と記されている。この学芸会の準備として、一月近く前の1月29日に委員の選出が班ごとに行われ、栄一氏が委員になっている。その後、2月10、12日と15日から19日まで毎日、劇の練習があった。栄一氏は「大岡いつぜんの守」の役を務めたという。19日には予行演習があり、家から袴を持っていった。

学期末になるといくつかの行事があったようだが、栄一氏を含めて尾形家の子女は優秀な成績を修めたことが記されている。こうして、高等小学校の修了の日が近づくやと謝恩会や卒業式が行われることになる。

3月24日

二時間授業をして一時よりしやおん會をした。僕は開會の辞をいふた。<sup>(ママ)</sup>二は正男君の謝恩の辞といふふう<sup>(ママ)</sup>にずんずん〜進んだ。色々の余興をした。お菓子を三つばかり食って家<sup>(ママ)</sup>に持つて来た。大へんにおもしろかつた。<sup>(ママ)</sup>

3月25日

十時より式が始まつた。<sup>(ママ)</sup>十二時しぎまでかゝつた。僕は公民學校に入るのだ。式後入團式があつた。家に歸つた。家では大へんによるこんであさりごはんをこしらへた。僕は優等<sup>(ママ)</sup>になった。家では知行もみえ子も皆優等生<sup>(ママ)</sup>になつた。僕はすゞり箱<sup>(ママ)</sup>をもらつた。

3月24日には謝恩会があり、栄一氏が開会の辞を述べたとある。その翌日の卒業式は、午前中

に終わり、その後、公民学校の「入團式」があった。家ではお祝いとして「あさりごはん」が用意され、栄一氏以外に知行氏もみえ子氏ら弟妹たちも「優等生」になったとある。

ここで記されている「公民学校」は、明治20年代に制定された実業補習学校規程に基づいて設置された「実業補習学校」をさすようである。多くの地域では、初等教育を終えた勤労青少年に向けて定時制で開校された。小学校に併設されることが多く、栄一氏の場合、鹿折地区の中心部にある鹿折小学校に通うことになる。また、日記には「公民学校」と「夜学」という記述がみられるため、昼間の授業と夜間の授業が日程や季節によって分かれていたと考えられる。

また、尾形家では、長男である忠行氏は気仙沼中学校に在学しており、ちょうど、栄一氏の卒業と同じ年に忠行氏も中学を卒業している。3月6日は、「中学の卒業式」で兄の忠行氏は、鹿折地区をまわって登校したようである。翌日、家に栄一氏が戻ってみると「大ぜいの人に来て居た」とある。家では「兄さんの卒業式のおよろこび」のためにお振舞いが行われていた。つまり、この年度に尾形家は、長男と次男がともに学校を卒業し、新たな生活へ進むことになったわけである。

当時の尾形家は、当主である彼らの父親が早逝し、母親が家業を切り盛りしていた。次代を担う二人の息子が修学年度を終えたことは、非常に重要な契機になっただろう。もっとも、栄一氏の下には知行氏やみえ子さんら弟妹たちが、まだ小学校に通学中であった。次男である栄一氏は、高等小学校に進学した時点で、兄よりも早い年齢で学業を終え、家業を手伝うことが期待されていたのかもしれない。他方で今後の生活、とりわけ徴兵制度などを鑑みた際の実学的な知識習得のためにも、学業の継続は必要とされていた。これらの折衷的な進路として「公民学校」への進学が求められたのではないだろうか。

さて、公民学校への最初の登校は4月11日とあった。その後、不定期に学校の日が記されており、科目としては、体操、珠算のほか、信号、歩哨や伝令などの教練を受け、さらには、「ボルドー液の製法を見学」（7月13日）してから、農業の先生から講義も受けている。ここで記されているボルドー液は、塩基性硫酸銅カルシウムを主成分とした殺菌剤であり、農薬として用いられた。時期はやや下るが、翌年の3月21日には「農業技師による講演」についての記載もみえる。ここで分かってくるのは、この公民学校の講義が、これまでより実学的な分野と徴兵を想定した軍隊で必要とされる知識の教授に重きを置かれているという点である。

秋になると「夜学」についての記載が登場する。11月8日の「今夜より夜學だ」という記載に始まり、翌年の1月22日「今夜は凱旋兵の歓迎會と夜學閉會式だ」という記載まで、都合、21日間、夜学に通った記録がある。ただし夜学でどのような授業を受けたかについては、ほとんど記載がない。また、夜学の期間中も、公民学校の出席日という記述は繰り返される。これらは制度的に重複しているはずだが、公民学校が昼間に行われるため、このような記載のズレが生じるようである。

年が明けて33年になると公民学校についての記載行事は、軍隊と深く関連する項目に収斂していく。例えば2月14日には、「査閲」があったことが記録されている。この日には教練と学科が実施されてから、査閲官である陸軍歩兵中佐、佐藤清吉からの質問があった。その質問は以下のようなものである。

#### 一、満洲事変の原因

- 
- 一、軍人に下された勅諭
  - 一、満洲のトク種ケンエキとはどんなものか
  - 一、唯今シエシのゼネブアでどんな會議は開かれて居るか
  - 一、戊申詔書のわけ。
  - 一、師團に聯隊は幾つあるか 四ツ  
    聯隊に大隊は幾つあるか 三つ
  - 一、日本陸軍に兵種はどれで幾つか。七ツ（砲工騎歩ケンシュチャウ空軍）
  - 一、歩兵はシ用する兵器をあげよ。

問いに対する回答が記されているものもあるが、文章での解答が予想される問いについては、記されていなかった。ただ、満州事変の背景やその権益などについての問いは、当時の帝国日本の同時代史に関わる問題である。査閲官が軍部の中佐である以上、その「正解」が事変を正当化する視座に立つものであることは間違いない。さらにその後は、軍隊の編成や具体的な兵種、兵器を問うものとなっている。<sup>(4)</sup>同時代の帝国主義的な政策についての歴史的、地理的な知識と兵士として学ぶべき知識が、学校での査閲を通して浸潤していく過程をここにみることができる。

33年の8月になると、実際の兵役に向けた「徴兵検査の見学」も行われる。

8月6日

今日は徴兵検査だ。公民学校で見学だ。朝雨の降るのもかまわず行く。大勢行った。(中略)

其のうちに身体の検査は始まる。

第一に身長むねのまわり。目方等である。

第二に目の検査

第三。耳のど等。

第四。かんせつ。しり等であった。

それは終ると職業などをきかれる口頭試問だ。次には司令官のせんこくだ。(甲種乙種などをいふ)。それで終る。午後には軍醫の検査についての話。司令官のお話。

ここでは、栄一氏たちが実際の徴兵検査の様子を見学している。20歳の検査に備えて、10代後半の少年たちは、その手順や義務としての兵役の意味について、実地で学んでいくわけである。軍医や司令官の話とも相俟って、「司令官のせんこく」で示される身体の健全度（甲種乙種）も、自らの矜持に関わる価値基準として内面化されていったと考えられる。このような経験は、学校の教練での様々な技能の習得にもフィードバックしていく。11月14日には、気仙沼周辺での合同演習も行われている。気仙沼南部の階上村を中心に、北軍（新月、気仙沼、鹿折、唐桑、松岩）と南軍（津谷、小泉、階上、大島、大谷等）に分かれて実施されたようである。

ここでも注意したいのは、身体の規律化は、それまでの学校教育、ひいては地域社会が受容していた行事とも、他ならぬ彼ら自身の身体の次元で連続性をもちえた点である、例えば、9月9日には学校行事として「行軍」があり、汽車で折壁までいき、室根山の登頂を行っている。<sup>(5)</sup>名称の通り

この行事は、軍隊での身体強化を意図したものであるだろう。ただそれは小学校の遠足との連続性を有しており、実際、栄一氏の感想も「大へんに面白かった」である。同じように日記に記録されている行事として、学校や青年団などが開催する運動会がある。ちなみに小学校の運動会や演芸会などは、父兄たちがこぞって出かける地域の年中行事となっていた。この延長上で栄一氏たちは、先の青年団や公民学校の運動会にも参加している。

地域で共有された娯楽として学校行事が読み替えられていたことを、国家的な制度による圧力を受容し、折り合いをつけようとする地域社会の構造的な柔軟性と捉えることができるのかもしれない。<sup>(6)</sup>

### ③……………農作業への従事

学業を続ける一方で、栄一氏は積極的に家業を手伝っていた。当時、尾形家では沿岸部でのイワシ漁の他に、ノリ養殖とカキ養殖を営んでいた。漁業とともに農業も小々汐の家々と共同で運営していた。対岸地区の土地を含めた複数の耕地で稲作や畑作にも従事している。いずれの仕事にも栄一氏は、臨機応変に参加していた。彼の日記にも稲作を中心として麦や雑穀、豆類、大根、ジュウネン（エゴマ）などの栽培の記録が残っている。この節では、日記の中の農作業を中心に抽出していくことにする。日記上での農業歴を作物ごとにまとめたものが図2である。栽培歴のうちイネについては頻繁に記されているものの、その他の作物については断片的で不完全な記録が多い。ただこれらの精粗もまた、栄一氏の関わり方だけでなく、尾形家における生業としての比重の軽重とある程度対応していると捉えることもできるだろう。

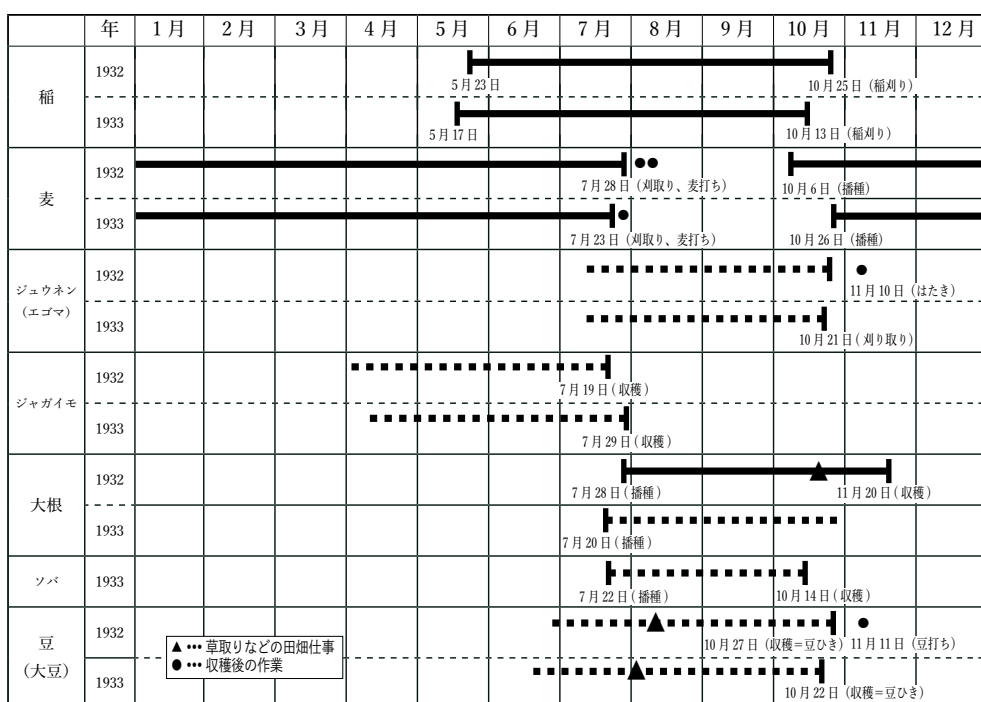


図2 尾形日記からみる小々汐の農業歴

## 稲作

『気仙沼市史 7 (民俗・宗教編)』は、稲作の作業工程を①種の保存、②農ハダデ、③種浸け、④苗代作り・種蒔き・苗印、⑤田打ち、⑥水引き、⑦こやし (肥料)、⑧田植え、⑨虫送り・鳥追い・雨乞い、⑩稲刈り、⑪お刈り上げ、⑫稲こき = 脱穀調整の順で紹介している [気仙沼市史編さん委員会 1994]。栄一氏の日記には①の種の保存と③の種浸けを除くほぼすべての工程や儀礼が簡潔にはあるが記されている。

ノウハダデは、32年の2月16日に「農畑デー」と記されている。この日、尾形家には小々汐内の親類のものが集まり、「もどつ」をこしらへたとある。この「もどつ」とは「元綱」を意味し、これを作る作業自体が農作業の始まりを示す象徴的な意味を担っていたとされる [川島 2014]。ここで作られた「もどつ」は、土間のオクラダイのところにかけてられ、実際に使われるわけではなかったようである。

次に幾つかの工程が抜けているが、この年の田打ちが5月23日と24日に行われた。そこからは「こぎり」という言葉が続く。6月10日には、田植えが行われている。「そうとめ」という言葉も登場しており、当時、早乙女による田植えが行われていたことがわかる。この後、日記では「水引」や「水見」といった言葉が頻出する。同時期の田仕事として繰り返し記されるのが「草取り」である。

こうして10月9日になって稲刈りが始まる。この日から10月25日の「家の脇の稲をやうへ〜今日かり終った」という記述まで断続的に稲刈りの記載がある。実りぐあいも異なるだろうし、天候も考慮しないとイケないだろうが、約2週間にわたって稲刈りと刈った稲の運搬やハザ干しの作業が続いたとみられる。この4日後の10月28日は旧暦の9月29日、「お刈り上げの日」であり、ほぼ生業歴が旧暦に沿ったものであることも確認できる。

翌年は、ノウハダデの記載 (旧暦の1月11日) の後、5月17日になって「田肥し」にするためにタクバに草を取りにいったと記される。昨年には肥料としてカスを用いていたことも記されているが、この時期はまだ、刈ってきた雑草を下肥として併用していたことがわかる。5月27日には田押、6月8日は代かきがあった。その後に田植えがあったようだが、「此の間田植水引等でいそがしい」ため、日記の記録が途切れている。

この年は、しかし、日照りのために水引が大変だったようである。「近頃しばらく雨は降らない。階上方面には田打ばかりして有る所も有るそうだ」と6月23日に記されている。同じ日の後半には、「近頃四方で毎日のやうに<sup>(ママ)</sup>雨ごいが有るそうだ」とも記されている。人間が制御できない天候については、農業の近代化が進んでいたこの時期でも、超自然的な存在に依存する意識が強かったことが伺える記述である。栄一氏の日記の中でも、田の場所によっては水が足りないという記載が繰り返し登場する。

雨乞いの記述に先立って23日には、「神山田は事にひどい。一日かゝって両方に引かねた事しば〜有った」とある。25日では「神山には先日かけ流しにしたせいかたつぷり有る。崎山には上二枚下二枚はがらり無かった」と記されている。ようやく26日になって一帯でそれなりの雨が降ったようで、「夜になっても雨は晴れそうも無い。明日一ぱいも降れば好いと思った。水不足の所は大よろこびだらう<sup>(ママ)</sup>」と記されている。

この後、草取りと水引が8月までの主な田仕事となる。こうして10月6日には稲刈りが始まり、



同じ月の17日頃にはその作業も完了したようである。1933年は閏月の年(閏6月)であり、旧暦では8月28日にあたるため、ほぼお刈り上げの日に完了したことになる。

### ムギ

稲作を補完するように季節をずらして麦作りも行われている。32年には6月23日に初めて「麦刈り」という記載が登場する。田の水見や初夏の草取りと並行して、麦刈りが続けられたようである。その後、7月19、24日に「麦うち」が行われ、25、26日には麦干しが行われている。夏を終え秋の10月27日になると「小麦をまいた」とあるが、その後の記述は見当たらない。

33年は7月3日から麦刈りの記載がある。ただこれ以前の6月終わりには麦つきについての記述があり、部分的には麦の収穫が始まっていたのかもしれない。その後、7月23日まで計6回、麦刈りの記載がある。なお7月13日と14日は「小麦かり」と記述されており、あるいはオオムギとコムギが別々に栽培されていた可能性もある。その後、23日にはムギウチ、8月1日にはムギツキの記載がある。そして10月19日には小麦を播いたとある。同様に10月26日には「麦をまく」とあり、翌日の27日には「小麦をまいた」と書かれている。ここでもオオムギとコムギの区別があるかどうかは判然としない。大枠としては、秋の10月下旬に麦を播き、翌年の6月から7月にかけて収穫していたようである。

### ジュウネン(エゴマ)、雑穀

ジュウネン(エゴマ)は、いずれの年も、種播きについての記載はなく、その他の作業についても明確ではない。気仙沼での現在の聞き取りによると、ジュウネンは5月中旬から6月にかけて種を播き、10月中旬から11月にかけて収穫するとされる。32年には10月20日に刈り入れがあった。11月10日には「ジュネ<sup>(ママ)</sup>はたきをする」と記されている。刈り入れたジュウネンから実の部分はたき落とす作業をさすようである。翌年は、10月21日に「ジュネ<sup>(ママ)</sup>をかって畠を作って夕方歸る」とあり、現在の聞き取りとほぼ同じ時期に収穫が行われていることがわかる。また、ジュウネンを作っていた畑は、早速、整地しなおし、次の栽培の準備を行っている。

なお、日記のなかには、9月14日にヒエの記述がある。その前後に2度ずつ、「ほどり(穂取りのことと考えられる)」の記述があり、収穫の形態からいって、これはヒエの穂を刈り取る作業と考えられる。ただヒエについては、播種や草取りなどの作業の記述が他には見出せないため、栽培時期の詳細は分からない。

また、33年の6月24日には、「きみ畠の草取の手傳をする」という記述がある。この「きみ畠」は、キビ畑のことだろうか。キビについての記述も他には見当たらないので、具体的な栽培過程は不明である。

### ジャガイモ

ジャガイモは、気仙沼ではカライモと呼ばれていた。32年はムギの収穫とほぼ同じ7月17、19日に収穫と貯蔵のための作業が行われている。21日には「からいもをかたしげる」という記載がある。23日のタバコ(間食のこと)には、「からいもの中だき」を食べたという記載もある。33年は、7月29日にイモを掘り、その翌日、「芋の大小中を別ける」とある。

### 大根

大根については、冷涼な地域で行われる夏期の種播きから11月の収穫という期間に対応した記

---

載が見られる。32年の7月28日には、「大根まき」があり、8月に入ると菊畑、大豆畑の草取りの記述がある。種を播いた大根畑の「草は大へんになる」とあり、クレゾールの除虫剤が散布されたことも記されている。8月は畑仕事の中心も草取りだったようである。

10月になっても大根畑では草取りがあり、11月20日になって「大根つみ」をしたことが記述される。おそらくこれが、大根の収穫をあらわすと考えられる。24日には「大根をつるしたり、大根くきにしほ水をくんだ」とある。

大根は、33年は7月14日に播種のための畑をつくっている。実際にタネを播いたのは7月29日である。「家のわきの大根をまくために芋掘をする」とも記されており、大根の播種とジャガイモの収穫がセットとなっていることがわかる。

### ソバ

ソバは33年の日記にのみ登場する。7月22日にソバを播いており、10月14日には「僕と兄さんはソバかりに行く」とある。これは、現在の気仙沼でのソバの栽培歴とはほぼ同じ期間にあたる。

### 豆類

豆類はアズキ、エンドウ、ササゲ<sup>(7)</sup>などの記録がある。このうちアズキは33年の5月19日にアズキを播いたと記され、エンドウは33年の7月18日に「エンドウもぎをする」という記述があるのみである。本州では、夏アズキは4月から5月上旬に種を播き、8月から9月にかけて収穫するとされているので、おそらくこの期間に栽培されたものだろう。エンドウは寒冷地では3月から4月に播種して7月中に収穫することが多いようである。エンドウも種を播いた記述はないが、収穫時期はこの地域での栽培期間に対応している。

寒冷地でのササゲの播種は、7月下旬から8月にかけて行われ、収穫は9月下旬から10月にかけてとされる。他の種に比べると比較的短期間で収穫が可能なマメである。日記では、32年の10月20日、21日、25日に「ささぎ引き」をした記述がある。33年は10月22日にササゲを収穫した記述がある。

ところで、日記にはダイズについて明確な記載がない。あるいは単に「豆」と記されているものがダイズに当たるのかもしれない。なぜなら、尾形家では味噌も豆から作っているため、原料となるダイズの栽培も行われていたはずだからである。豆については、32年の8月下旬に「豆の草取り」をした記述がみられ、10月26、27日に「豆ひき」を家族でしたことが記されている。さらに10月の終わりから11月初旬にかけて、「豆かけ」や「豆ひろい」、さらには「豆打ち」といった記述がみられる。10月26日の前日までは、ササゲを引いた記述があり、その翌日から「豆ひき」に変わるため、ここでの豆はやはり、ダイズと考えてよいのではないだろうか。33年になると8月初旬に豆畑の草取りと思しき記述があり、10月14日から17日にかけて「豆ひき」や「豆かけ」をしたことが記されている。豆を畑から引き、乾燥のためにハザにかけ、こぼれた豆を拾いつつ、乾燥後に豆を打って中身を取り出していたのだろう。

以上のように農業については32年と33年で、仕事の内容にそれほど大きな違いはみられない。すでに栄一氏は、高等小学校の段階からある程度、農作業に従事した経験があり、それらの作業についても把握していたと考えられる。

## ④……………漁業への参加と展開

この節では、小々汐での漁業への従事の様子を日記から明らかにしていく。海での生業は、3節の初めに記したように大きく分けてイワシ漁、ノリ養殖、カキ養殖、ドウシバなどのワナ漁、アサリを中心とした貝類の採取、タコ釣り、その他の釣り漁に分けることができる。このうち、主要な家業として成立していたのは、イワシ漁、ノリ養殖、カキ養殖である。いずれもオオオイが他家の者を雇って四ヶ浜（小々汐の他、周辺の大浦、梶ヶ浦、鶴ヶ浦の総称）の沿岸部で操業していた。

ドウシバとは、木の枝（シバ）を海中に沈めて魚を寄せて捕まえる漁法である。これ以外にもウナギやアナゴを捕らえるウケ漁も行っていた。また、日記にはアサリの採取とタコ釣りについての記述がある。いずれも開口の日時が記されており、地域社会での慣行の中で漁が行われていたことがわかる。これらの漁はどの程度の収益があったのかは分からないが、換金性のある漁獲物であったと考えられる。以上のような日記に記された主な漁業の全体像をまとめたものが図3になる。以下ではイワシ漁、ノリ養殖、カキ養殖、アサリの採取、タコ釣りについて紹介していく。

### イワシ漁

小々汐を含む四ヶ浜では、明治以前からイワシ漁が盛んに行われていた。当時、気仙沼湾にはイワシの回遊があり、それらを狙った船曳き網による漁が中心である。1980年代の聞き取りに基づく報告によれば、四ヶ浜でのイワシ漁は、夏網と冬網に大きく分かれる。夏網で取れるイワシは、カツオの一本釣り漁の生き餌に用いられ、冬網のイワシは、主に肥料用のイワシカスに加工された。小々汐を含む四ヶ浜では、イワシ漁には二艘の船による巻き網が用いられる。小々汐では、モドアミと呼ばれていた[東北歴史資料館編 1984]。

32年の前半の日記でのイワシ漁の記述は、1月中旬の2回だけである。そこでは「イワシの頭をもぐ」作業とイワシを加工したカスを家内に運び入れたことが記されている。夏期になっても、記

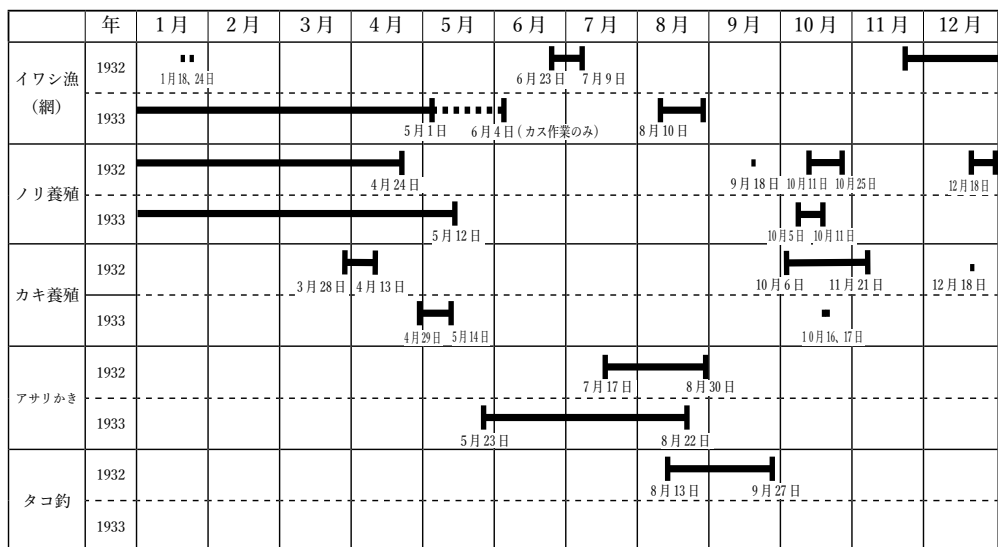


図3 尾形日記からみる小々汐の漁業歴

録に基本的に変化はない。6月23日の「網そめ」に始まり、一週間後の「網おろし」の様子が記されるが、漁そのものに関わる作業についてはほとんど記述されない。6月30日には「かすたきだ。(中略) 少しいわしは入ったそうだと伝聞調で記されており、栄一氏自身がカスたきなどの作業に関与していなかった可能性もある。

しかし、この年の冬になると大きな変化が生じる。イワシ漁とその作業についての記述が明らかに増加する。11月23日から「網作り」の作業が記される。作業自体に栄一氏は携わっていないが、網が完成した11月27日には船に「あみをつんだ」と記される。その翌日は、カキを食べて「腹はすり」になったので寝込むことになるが、以後は「あぶら取り」(11月29日)や「いわしたき」(12月1日)、「こなれたかしほし(カス干し)」(12月3日)などの作業についての記載が続く。12月4日には「今日は兄さんが休しんだので僕はあみに行く」という記述がある。キッサマに一杯入ったイワシは、家の近くまで運ばれたともある(キッサマやカッコは四ヶ浜の漁に用いられる小型の漁船の名称)。ここで明確に栄一氏がイワシ漁に参加し、その後の加工作業(主にイワシカスを作る作業)にも従事していたことがわかる。こうして32年の11月は6日間、12月は25日間、翌年の1月は10日間、2月は20日間、3月は14日間、4月は17日間、5月は5日間、イワシ漁についての記載がある。5月には作業以外にカスの売買についての記述があり、自分たちの畑にまくカスを扱っている様子も記される。

33年の夏になるとさらにイワシの漁について具体的な記録が記されている。8月10、11日には網おろしとその修繕について記録され、その後も「網仕事」という記述が続く。14日になると「僕も網引の一人として仕事をする」と明示されており、そこから網を巻いた場所や漁の様子などが記録されている。

8月16日

朝早く起きて網に行く。田のしりにまいた。大鯛カゴで中ばかり。晝すぎに行く。まいたらからかになった。

8月18日

今朝は潮は早いのでまかない。

「かこ」は全部そろった。

田のしりに船を置く。午後に田のしりにまいたらあたり物は有ってあらてをいためた。網を上げて歸る。さばは附いたので釣った。二十匹ばかり。

8月16日には、「田のしり」という場所で網をまいたとある。別の日には、「笹平」(同23日)や「長島」(同29日)といった場所でまいたとも記されており、イワシの回遊を待ち受けるポイントが決まっていたことがわかる。これら四ヶ浜や大島周辺のイワシ漁に関わる海上名は、『気仙沼市史7(民俗・宗教編)』に詳しく図示されている[気仙沼市史編さん委員会編1994]。これによると漁場は、四ヶ浜の沿岸部からその対岸部、大島周辺と唐桑の沿岸部にかけて広がっている(図4参照)。市史に記された漁場のうち、(5)長畑、(9)サンキョ、(19)ウドウ、(25)ナガヅラヒラはほぼ同じ名称が日記にもみられる。また、日記中の「田のしり」や「ゼッカァ」は、大島周辺の(13)



図4 気仙沼湾でのイワシ漁場

竹の尻や (24) ゼズミと関連しているのかもしれない。「田のシリ」が続くのは、時期によって特定の場所にイワシの回遊があり、網をまく場所もある程度特定されていたからかもしれない。

8月18日には、漁の際のアクシデントが記されている。「田のシリ」に網をまいたところ、「あたり物は有ってあらでをいためた」という。漂流物が船にぶつかり、一部が破損したことを示している。これらの記述は栄一氏自身が船に乗り込み、各々の場所で漁に従事していたからこそ、記録できた内容である。

このように2年間の日記で、イワシ漁での栄一氏の役割は大きく変化していることがわかる。彼の高等小学校から公民学校に進学した年の前半は、体力や経験を必要とするイワシ漁には参加していなかった。しかし、同じ年の冬期の漁からは、彼自身もカコとして漁に参加することになる。尾形家の、あるいは小々汐での生業活動を支える一員として栄一氏は、成人としての一步を踏み出したと捉えられるだろう。

**ノリ養殖**

ノリ養殖は、近世後期に気仙沼にもたらされた。小々汐を含めた四ヶ浜でも明治以前からシバキを用いたノリ養殖が行われていた。この地が気仙沼におけるノリ養殖の発祥の地という記述もある[東北歴史資料館編 1984]。

養殖は冬期の11月頃から始まり、採取は翌年3月一杯まで続く。養殖とはいえこの頃は、海中に沈めたノリシバにノリ胞子が付着してノリが自生するのを待っていた。一連の作業は、この自生

したノリの採集から始まる。採ってきたノリを洗って砂や石を除去し、細かく刻む。刻んだノリを四角いノリスにはめて濾し、板海苔状にして天日で干す。干し上がったノリからホコリなどをはたいて落とし、形やサイズを揃えるまでが主な工程である。

栄一氏の日記には32年当初からノリ養殖を手伝う記事が盛んに登場する。1月には7日間、2月には3日、3月には7日間の記録がある。4月に入ると「のりほしばをふぐした(4日)」,あるいは「のりはせをふぐした(24日)」という記述がみられるので、確かに3月一杯でノリの収穫と加工は終わったと考えられる。

32年の秋以後の記述を見ると、ノリに関係する記録は、10月11日に「今日はあさよりしばたてだ。・・・私もしばはこびをする」と記されたのを皮切りに、25日まで5日間、シバタテ作業の記載がある。この一月以上前に「大田しよりのりしばのふるいのはこぶ(「大田し」は小々汐の浜付近の地名)<sup>(8)</sup>」と書かれていたが、こちらはその年の養殖に関わる作業なのか、それに先立つ準備作業なのかは、日記からではわからない。

その後、しばらくノリに関する記述はなく、12月18日になって「お母さんたちはのりとりに入る」と記される。この約2ヶ月の間にノリが成長したということだろうか。これ以後、ノリの収穫作業に栄一氏自身が関わっていったことが記される。12月は7日、翌年の1月と2月は11日間、3月は8日間、そして4月は3日間、ノリに関わる作業がみられた。さらに5月に入って5月7日から12日にかけてハセ作りからノリを取りに行き、干しおえるまでの作業が記されている。この年は5月初旬までノリの作業が行われていたことになる。あるいはこの年が閏月のある年だったため、通常よりもノリの生育が遅れていたのかもしれない。

既述したように栄一氏の日記は、行事や作業が簡潔に記されていた。そのため細かな内容や前後の文脈をつかみにくいことがある。ノリについても、各々の作業は断片的に記されるのみである。日記に記されたノリに関わる作業を列挙していくと「ノリをとる、ノリしぼり、ノリをすく、ノリをつける、ノリを干す、(ノリを)ハセにかける、ノリをはがかす、ノリを入れる、ノリをはたく」といった記述がみられる。ハセについては、「ハセをふぐす、ハセを作る」といった言葉もみられる。

最初のノリをとるとは、文字通り、ノリシバにてノリを収穫する作業だろう。「ノリしぼり」は、取ってきたノリを洗い、水気を切る作業だろうか。あるいは次の「ノリをすく」とよく似た作業工程のことかもしれない。「すく」は、ノリを方形の枠に入れて水を切り、四角く整形する作業のことであり、「濾く」という表現に対応すると考えられる。ノリを干す、ハセにかけるといった作業は、ハゼのノリスに板状にしたノリを置いて、天日で乾かす作業である。「はがかす」はノリスからノリを外す作業だろう。ちなみにノリは、一枚一枚、ノリスにノリを留めるための竹のピンが用いられていた。ただノリをつける、という作業は、ハセに「付ける=固定する」のか、あるいは海苔を水に「浸ける=浸す」のか、いくつかの意味が考えられるが、判然としない。

#### カキ養殖

カキ養殖についての記述は、32年の3月28日に初めて登場する。カキの養殖の仕掛けを作ったとあり、「なが木はくまない、雨がふるため。つりがねばかり切った」とある。この時点ではカキを吊すためのカキ筏を作っていない。翌日には「兄さんと二人で竹やぶに行っにかきの養殖につ

かふ竹を」を、100本ほど切ったとある。タケは4月2日にも切られており、どうやらこれらのタケでタルの代わりにつけるウケを作ったようである(4月13日)。

前後して手伝いの小々汐の者たちと「いかりを作る松の木」(4月6日)を切ったり、養殖のための「わく」(3月31日)を作ったりしたことが記されている。

この3月終わりから4月前半の作業の後、カキに関する記載はしばらく途絶える。次の記載は、秋、10月6日である。この日と翌日はカキの「カイデ」が「ひれて」いること、おそらくその補充を作ったことが記されている。11月18日は「かきいかだは流れた」とあり、それに先立って「カキは流れた」(10月21日)、「少しだるんで居た」(同25日)といった記載があり、いずれもカキ筏のトラブルをさすと考えられる。

こうして11月27日には、「かきあげ」という記載がある。養殖したカキの収穫作業と考えられるが、これが何年間、育てたものなのかは日記からは分からない。この作業に栄一氏は加わらず「あみの方に出る」とある。実際の作業は、小々汐内のカキ養殖に参加している者たちが行なった。翌年、2月15日には、杉の木を切り、「かきのうきたるのくれ木」として「せいはんからひいて」もらったとある。どうやら、この年はタケだけではなくウキタルも用いたようである。

#### 貝の採取

貝類としては、ほぼアサリの採取の様子が記されている。アサリについては、1932(昭和7)年は7月17日に初めて記され、8月13日まで計10回の記載がある。翌年は5月23日(旧暦では4月の晦日)が「アサリの開口」と記され、家中でアサリを取りに行く様子が記される。この年は、計11回、アサリについての記載があり、最後の記載日は8月22日である。日記の限りでは、5月終わりから8月の後半までがアサリの漁期と考えられる。

このアサリの採取は、栄一氏本人以外に家族の者たち、特に女性たちが参加していることが記されている。例えば32年8月3日には「朝早く家より皆あさりかきに行く。(中略)アサリかきに仙台のおばさん、きよちゃん、みえ子等も行く」と記されている。また、33年の8月5日には、「お母さんたちはむかひにあさりかきに行く。僕とおばあさんは表をかく」と記されている。その前日も、母親たちが「むかひ」に行き、「おばあさん」が前の浜でかいたと記されている。アサリについての記述、とりわけ、実際に浜でアサリをかく場面では栄一氏以外はほぼ女性である。実はアサリかきは、基本的に女性の作業であったとされる。1980年代の四ヶ浜での聞き取り調査をまとめた『三陸沿岸の漁業と漁業習俗 東北歴史資料館史料集10』にも、「この漁は女性に限られ、収入は相当なものになり、盆の小遣いにされた」[東北歴史資料館編1984:87]と記されている。アサリかきの作業において栄一氏は、一人前の男性ではなく女性に混じって作業を行う「子供」としてカウントされていたのかもしれない。

採集場所について日記に詳細な記述はないが、栄一氏自身は小々汐の周辺で取ることが多かった。ただすでに引用した33年の記述で、「むかひ」という場所が記されている。8月5日には、「お母さんたちはむかひにあさりかきに行」き、その前日も母親たちが「むかひ」に行ったとある。どうやら、この「むかひ」は小々汐の対岸の気仙沼湾で「州浜」と呼ばれる浅瀬付近と考えられる[東北歴史資料館編1984]。現在は埋め立てられ、かつての浅瀬は完全に失われている。

採れたアサリはメカゴに入れ、その後、殻剥きをした様子が繰り返し記される。何らかの加工が

行われたようだが、最後は保存のために干していたようである。日記には、アサリかきをした後に「金網であさりほすを作る」とあり「皆に上手だとほめられた」（33年8月7日）と記されている。その後の調査でも「煮て干しあげて出荷」〔東北歴史資料館編1984 87〕という記述がある。

### タコ釣り

タコ釣りは、栄一氏の日記でも特徴的な記録が残されている。この漁はアサリ採りと同じく「開口」という言葉が使われ（1932年8月31日）、一定期間に制限された漁であったことがわかる。もっとも開口日以前にも「タコ釣りをした」といった記載があるが、これは船に乗るか否か、小々汐の地先か否かでの区分があるのかもしれない。他方でアサリ採りとは対照的に、この漁は船を駆使して、男性たちが行う漁として記録されている。そこでは成人男性も登場するが、栄一氏の兄弟や「利雄あんこ」と呼ばれる同年代か少し上の世代が主に参加している。日記には、タコ釣り用の糸塗りに始まり、餌のサバを取ったり、場合によっては購入したりしたことも記されている。開口日以後は、連日、兄や弟とともに舟に乗って沿岸部を回る様子が記されている。

9月2日

朝早くおきて兄さんと二人で出船 ばんそのあたりをひっぱる。つらない。うどう<sup>〇〇〇</sup>に行つて小たこ一枚（おれ）つゝた。晝すぎにぜっかあ<sup>〇〇〇</sup>等をひっぱる。つらない。夕方近くかごほら<sup>〇〇〇</sup>に行く。兄さんは二枚。おれ二枚。となりのおどや一枚つゝた。大漁なのでよろこぶ。家に来てほめられた。新場に持行く。一貫四百二十匁（四文五分）。六十一匁也。

この時、釣ったタコは、小々汐では屋号を「新場」という家に持っていくと、重さを測って換金してもらえたようである。おそらく新場が市場にタコをおろしていたのだろう。換金性が明示されている点で、タコ釣りは他の釣りからは区分しておいた。

ここで、興味深いのは、「ばんそ<sup>〇〇〇</sup>」や「うどう<sup>〇〇〇</sup>」、「ぜっかあ<sup>〇〇〇</sup>」、「かごほら<sup>〇〇〇</sup>」といった傍点つきの言葉である。これらは、いずれも先に記した気仙沼湾のイワシ網漁場の海上名と深く関連すると考えられる。実際、「うどう」という地名は市史の地図上の大島の東岸部の地名に登場する（図4参照）。もう一つ気になるのは、タコ釣りの記載が1932年には約1ヶ月の間に12回にのぼるのに、33年には一度も記録されていないことである。同年のこの時期は、そもそも日記が記載されなかった期間もあり、また、イワシ漁や農作業で多忙をきわめたからかもしれない。タコ釣り漁は換金性があるものの、収穫量などから考えて漁としてのプライオリティは低かったのではないだろうか。船の扱いが可能になった若い世代を中心とした漁とも言えるだろう。

ただし生業としては比重の低いタコ釣り漁が、成長期の少年にとって重要な役割を果たしていたのかもしれない。彼や兄の忠行氏たちは、イワシ漁に加わる以前から自分たちで船を操作し、四ヶ浜はもちろん大島から唐桑半島まで気仙沼湾の沿岸部を広く操船し、各々の地名に知悉している。おそらく、それぞれの地名とその特徴、さらには山見のような場所を把握する技能も習得していったと考えられる。このような経験が、イワシ漁での現場での作業や先輩たちとのやり取りに活かされていったことは間違いないだろう。



## ⑤……………子供から大人へ

気仙沼の小々汐集落で昭和初期に記された日記から、「子供」から「大人」へと成長しつつある個人の生活誌を垣間見てきた。はじめに示したように、子供というカテゴリーは、家族や教育の近代的制度の変容のなかで誕生した。このような過程は、種々の揺らぎやズレを孕みつつも、明治維新以後の日本社会でも生じた現象である。

元森恵理子によれば「大人」とは区別された「子供」という観念が、「教育領域の主たる対象となるのは、明治20年頃から」[元森2012 28]とされる。その後、子供の領域は、人の成長過程の独自の段階として、大人によって見守られるとともに、彼らが適切に子供として振る舞い、かつ大人へと成長していくように配慮することが、初等教育に求められることになっていったという[元森2009]。子供についてのイメージは、大正期の童心主義によって一般へも膾炙していく。子供は大人とは異なる独自の精神を有する存在として、その内面が担保されるだけでなく、「子供らしい」表現をすべき存在へと展開していくことになった[日本児童文学学会編1988]。

さて、ここで注目したいのは、これらの近代化の図式において前提とされる、前近代のライフコースである。アリエスはフランスのアンシャン・レジーム以前には、徒弟制に代表される「小さな大人」としてのライフコースを見出した[アリエス1980]。当時の若年層は、早いうちから親許を離れ、職人を中心とした様々な職種の見習いとなる。徒弟制での新参者は、先輩や親方から生業となる仕事を実地の経験のなかで習得していく。彼らは日々の生活、衣食住をともにすることで、周辺的な雑務から徐々に専門的な技能や知識を身につけていく。彼らは仕事に参与しつつ、生活に必要な知識を年長者から学ぶわけである[レイヴ、ウェンガー1993]。実はこのような教授のシステムは、民俗学によって早くから見出されていた。柳田國男は、「郷土教育」についての文章のなかで次のように述べている。

郷土教育がもし文部省の考えるごとく、今後新たに追加しなければならぬものだったら、以前はかえって村々でそれを行っていたのである。学校は灼のほとり緑樹の蔭、または青空の下であり、教員は目に一丁字なきちん髷の故老であり、教科書は胸に描く印象と記憶とではあったけれども、その頃の青年はほぼ一人残らず、覚ゆべきことを覚え学ぶべきことは学んだのみならず、年を取るにつれてさらに自身がまた教師となって、教材に若干の補充改訂を加えつつ、次に生まれて来た者を教えていたのである[柳田1993 516]

柳田は、村のなかにおける文字も知らない年長者が教員となり、「青年は覚ゆべきことを覚え学ぶべきことは学んだ」という。ここで柳田が強調するのは、主に道徳教育であり、彼らの「群としての教育」によって集団として生活していくうえでの規律を学んでいったとされる。同様の視点は、柳田と大藤時彦の共著でも繰り返され[柳田、大藤1943]、村の教育装置として「若者組」や「子供組」といった存在に焦点が据えられることになる。福田アジオは、柳田が「子供という人生の段階は、群の力によって教育され、その結果として一人前になる」という視点を提示したと述べ、彼

が「群の教育機能を非常に高く評価して、近代学校教育に対置している」[福田1991 150]と記している。

民俗学が近代教育とは異なる「群の教育」を見出したことは十分に評価されるべきだろう。ただ柳田を中心とする民俗学では、「若者組」や「子供組」の内実についての体系的な調査や検証が進められることはなかった。また、柳田が「道徳」的な教育を重視したために、徒弟制度に含み込まれていたはずの種々の技能や民俗知の習得についても、余り関心が払われることはなかった。本来、民俗学が踏み込んで考察すべきだったのは、地域社会や職人集団などの実践共同体における協働慣行であり、実践感覚に基づく知識の習得過程ではなかっただろうか。

さらに問題となるのは、近代化のなかの学校での教育と「群の教育」を対置させたことである。確かに明治以後の学制の普及のなかで、「群の教育」の多くは規制され、失われていったことは事実だろう。しかし、竹内利美の報告による「子供組」は、「野卑な弊風として部分的に禁圧を受けた」一方で、「案外に根強く存続し、若者組（青年団）との村落内における連繋も、多くはそのままひきつづいている」[竹内1957 63]とも指摘されている。さらに彼は、「義務教育制によって、子供（少年）期の年令区間には一層明確な切目が生じ、それが子供組の加入年令として一般には通用している」[竹内1957 63]とも述べている。ここで重要な視点は、近代教育とそれ以前の教育システムを対置して議論するのではなく、両者が同じ社会状況のなかで軋轢や反発を生む一方で、受容され、融合されていくダイナミズムを明らかにすることである。

これまでみた気仙沼の事例は、これらの課題について有効な視座を提示してくれる。栄一氏が高等小学校から進学した「公民学校」は、実学的な側面と、徴兵制を視野に入れた教練や行軍の課程が組み込まれていた。実学的な側面は、高等小学校での農業実習にも通じる、当時の教育制度に求められた主題の一つである。地域社会の生業、とりわけ農業、漁業といった一次産業への寄与が、一般教養としての学校教育と併存して重視されていたのだろう。公民学校ではこの側面がより顕著となり、農業についての説明や、家業の指針としての「自力更生」の訓話などが記録されている。

他方で教練や演習では、徴兵のための予備的な知識が繰り返し教授されていた。同時に兵卒としての体力を維持するために、毎年、行軍が実施されている。現役の将校が生徒を「査閲」することもあった。当時の学校教育が、富国強兵という明治以後の近代国家のスローガンのもとに国民を構築する装置であったことを示している。査閲で問われる満州の權益という課題や、徴兵検査の見学は、栄一氏たちに「大日本帝国民だ」という自覚を促し、諸々のイデオロギーを内面化する役割を果たしていたわけである（図5参照）。

もっとも、2節で指摘した行軍には兵としての体力の鍛錬を目的とする一方で、小学校の遠足と同様のレクリエーション的な側面も併存していた。同様に運動会という場も、家族や地域社会を巻き込んだ年中行事としての娯楽的要素があったことも指摘しておくべきである。

このように国家的な教育制度のもとに社会化されていく一方で、栄一氏は家業に従事する過程で自らの社会的なポジションの変化を経験していく。とりわけ当時の尾形家の生業の柱である漁業の現場で、彼の社会的ポジションの変化を確認することができた。その1つがイワシ漁でのカコへの参加である。公民学校に入った年の夏の時点で栄一氏は、船上でイワシ網を引くカコには参加していない。しかし、その冬の漁からは、本格的にイワシ漁に加わっている。4節でみたようにこの時

期の日記には、気仙沼湾各地域の水際の地名や船での実務、実際の漁の良し悪しなど、彼が新たな作業の現場で経験したことが、簡潔ながらも新鮮な筆致で記されていた。

ここで注意したいのは、生業への段階的で緩やかな参与のあり方である。これは、イワシ漁以外の海での作業の記録から浮かび上がってくる。まず、イワシ漁に先立って、海で必要とされる知識を習得する場としてタコ釣り漁が想起される。タコ釣り漁は、栄一氏



図5 尾形栄一日記 1932年の巻末

や兄や弟たちにとって、自らの操船で気仙沼湾を巡り、各々の地形の特質やそれらの名称を知悉する機会であった。タコ釣りの際に記される水際の地名は、イワシ漁の現場の記述でも頻出していた。タコ釣りで操船する以上、各々の場所の潮の流れや干満の違いについても経験的に学んでいたに違いない。このような自然環境についての民俗知は、集団で行うイワシ漁でも活かされるが多かつたはずである。だとすれば、タコ釣りへの参加は、換金性のある漁への参与というだけでなく、集団で行うイワシ漁のための海についての知識の習得過程の場と捉えることもできるだろう。

他方で彼が社会的にはまだ大人と子供の境界的なポジションにあったことを示唆するケースとして、アサリの採取がある。日記に記されている通り栄一氏は、32、33年ともにアサリの採取に参加している。しかし、アサリの採取は、基本的に女性と子供の仕事と考えられていた。実際、日記の中では、栄一氏や弟の知行氏、ミエ子氏もアサリ取りに参加しているが、主要な採取者は母親や祖母といった女性であり、大人の男性が参加した記述はない。ということは、アサリ採取に33年も加わっている時点で、栄一氏はまだ、「子供」とみなされることもあったということだろう。「家ではいけという」という記述には、栄一氏自身の躊躇いの片鱗をみることもできる。

以上のようにみると日記が記されている2年間は、栄一氏のライフコースにおける分岐点の1つであった。彼が受けた当時の学校教育は、一面で国家が求める国民像を体現するものである。それらは自らの生業を継続して生活を更生し（ひいては納税を行い）、兵士として軍に入隊して国家に忠誠を尽くす人材を生み出すために制度化された。ただ、そのような教育制度でさえ、部分的には地域社会の構造や価値観によって読み直され、日常的な慣行に受容されていったことがわかった。他方で彼が参与していった生業の営みは、習得すべき内容と実際の参与の両面で段階的なものであり、仕事や慣行ごとに微妙な濃淡を含み込んでいる。このような濃淡と国家的な制度の部分的な読み替えは、表裏一体のものと捉えることができる。

当時の地域社会は、構造的に閉鎖的なものではありえず、外部に開かれた存在であり、常に揺らぎを抱えていた。それでもその社会のなかで生きる人々は、日々の生活における慣習的实践を通して、状況に埋め込まれた知識を習得していった。その時の教師は、親であり兄弟であり親戚であり、近隣の年長者であった。少なくともこの時代の気仙沼では、地域の慣習は、段階的な知の習得と社

会的立場の揺らぎをはらみつつ、学校教育の制度的布置による国民としての主体化が及ぼす影響を緩和すると同時に補完する役割を果たしていた。このような動態のなかでの個々人の主体化とそこでの複数の社会化の可能性こそが、生きられた民俗文化の実像として把握されるべきではないだろうか。

## 註

(1)——例えば、子供の神性を端的に示す事例として紹介されてきた「7歳までは神のうち」という諺に代表される幼児をめぐる信仰については、本論で述べた福田アジオら民俗学者だけでなく、歴史学者たちからの批判も行われている〔柴田2013、島津2020〕。

(2)——『少年世界』は、多くの雑誌を発行していた博文館が1895（明治28）年に創刊し、1930年代初頭から（昭和9）年の初めまで発行していた児童雑誌である。主筆に童話作家の巖谷小波を迎え、当時の子供向け雑誌のなかで最大級の発行部数を誇ったとされる。『少年倶楽部』は、1914（大正3）年11月に主に10代前半の少年を対象として発刊された。当初は2万部程度であったが、佐藤紅緑、吉川英治、大佛次郎らの人気作家が連載に加わることで部数を大きく伸ばしていった。また、栄一氏が購読していた1930年代には、田川水泡の『のらくろ』や島田啓三の『冒険ダン吉』といった漫画連載も始まっている〔日本児童文学学会編1988、齋藤2015〕。当時の子供たちにとっては、もっともポピュラーな雑誌であったと考えられる。実際、栄一氏の日記の中でも何度も登場し、「小俱」と略した記載もみられる。

(3)——ここで記されている「トク種ケンエキ」とは、関東州に代表される中国東北部から内蒙古にかけての鉄道や鉱山、当該地域での商租権などについて、日本側が主張する権益のことである。この権益は、日露戦争後に繰り返された日露協約や清との満州協約などの締結によって効力を有するはずであった。しかし、第一次世界大戦中に日本はドイツと交戦状態となり、その少し前に成立した中華民国との間でも対立を深めることになる。中華民国は、国権回復運動の盛り上がりの中で日本の権益を脅かすことになったため、関東軍を中心とする軍部が独走し、柳条湖事件を皮切りに満州事変を勃発させることになる。つまり、この特殊権益の確保が、最初の問いにあった満州事変の背景そのものであるとも考えられる。

さらに問いには、「シエシのゼネブア」と記されているが、これはスイスのジュネーブのことだろう。よってこの会議は、当時の国際連盟の総会を指している。満州

事変をめぐって国際連盟が派遣したりットン調査団は、日本の権益を認めつつも、満州国の建国は否定する内容の報告書を公表していた。この内容が最終的に国際連盟の総会で圧倒的多数で支持されるのは、1933年の2月24日である。そのわずか10日前に軍から派遣された佐官が、東北地方の港町で世界情勢における日本の立場を子供たちに訓育していたわけである。歴史の大きな分岐点のなかで栄一氏たちが、日々の生活を送っていたことを改めて想起させられる記述である。

(4)——兵種や兵科は、当時の陸軍の戦闘や後方支援を含む、専門的な職務ごとの区分である。昭和初年の頃は、日記にあるように七つの兵種、すなわち砲兵、歩兵、騎兵、工兵、憲兵、輜重兵、航空兵に分けられていた。日記後半の「ケン シュチャウ 空軍」の兵種は憲兵以下三つの兵種に相当する。ちなみに輜重兵は、兵站の担当で後方支援が主な任務である。

(5)——折壁は、気仙沼の中心部から一ノ関に向かう街道沿いに10キロほど進んだ所に位置し、鉄道の駅がある。室根山はそこから北方に約3キロの場所にあり、標高は約900メートルである。

(6)——興味深い記事として、小々汐から入隊した若者が、入営先の仙台で怪我をしたことについての記載がある。この知らせを聞いた小々汐の人たちは、村の社である金比羅の碑で「オヨウゴモリ」をしたとあり、栄一氏や弟の知行氏も参加したと記されている。軍隊に入隊した村民の危機的な状況に際して、ムラのなかの民俗信仰が呼び起こされ、親戚を中心とした地縁・血縁により怪我の回復が祈られている。このような動きもまた、本論が示す近代的なシステムの地域社会による再解釈と捉えることができるだろう。

(7)——ササゲは「ササギ」、「さゝぎ」、「サタギ」などと表記されている。

(8)——小々汐内の地名で、海岸近くの船溜まりの側で広場のような空間になっていた。日記には「大田し」の他に「太田し」「大だし」「大たし」といった名称で呼ばれるが、いずれも同じ場所をさすと考えられる。

(9)——以上の他に栄一日記には副次的な生業やほぼ、

趣味のレベルでの海での採取や釣りが盛んに記されている。そこで釣られるのは、「おおがい」と呼ばれるウグイの海降型（こちらもおがい、オウガイ、ヲウガイなど複数の表記があった）、サバ、ボラなどである。田仕事の際に釣り竿を持っていったという記述もあるので、川魚も釣っていたと考えられる。これらが換金されたという記載はないので、基本的にマイナーサブシステムと捉えることができるだろう。

## 参考文献

- 飯島吉晴 1991『子供の民俗学：子供はどこから来たのか』新曜社
- 川島秀一 2014『小々汐仁屋の年中行事』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 川村清志 2019「民俗文化資料のデジタルアーカイブ化の試み：文化資源化と研究分野の更新に向けて」『国立歴史民俗博物館研究報告』214, pp219-243
- 川村清志・葉山茂 2019「年中行事の動態的把握のための基盤作成 ―複数資料の並列化と階層化に向けて」『国立歴史民俗博物館研究報告』214, pp161-193
- 気仙沼市市史編さん委員会編 1994『気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編』気仙沼市市史編さん委員会
- 齋藤三千政 2015「『少年倶楽部』名編集長・加藤謙一と流行作家・佐藤紅緑との運命的な出会い」『弘前医療福祉大学紀要』6 (1), pp111-120
- 柴田純 2013『日本幼児史―子どもへのまなざし』吉川弘文館
- 島津毅 2020「古代中世の幼児と葬送―『七つ前は神のうち』か」「歴史学研究』995, pp1-16
- 竹内利美 1957「子供組について」『民族学研究』21 (4), pp61-67
- 東北歴史資料館編 1984『三陸沿岸の漁業と漁業習俗 東北歴史資料館史料集10』東北歴史資料館
- 日本児童文学学会編 1988『児童文学辞典』東京書籍
- 福田アジオ 1993「民俗学と子ども研究：その学史的素描」『国立歴史民俗博物館研究報告』54, pp145-162
- 本田和子 1982『異文化としての子ども』紀伊國屋書店
- 元森絵里子 2009『「子ども」語りの社会学：近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房
- 元森絵里子 2012「『子ども』と責任の歴史社会学」『教育社会学研究』90 (0), pp25-41
- 柳田國男 1990「小さき者の声」『柳田國男全集』22
- 柳田國男 1993「国史と民俗学」『柳田國男全集』26
- 柳田國男・大藤時彦 1943『現代日本文明史18・世相史』東洋経済新報社
- フィリップ・アリエス 1980『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信, 杉山恵美子訳, みすず書房
- レイヴ, J・ウェンガー, E. 1993『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』佐伯胖訳, 産業図書

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2022年11月21日受付, 2023年5月22日審査終了)

## **The Process of Participation in Schooling and Livelihood at Local Communities : A Case Study of Kesenuma City, Miyagi Prefecture before the World War II**

KAWAMURA Kiyoshi

This study re-examines how individuals socialize during conflicts between the customs of rural society, where family systems and kinship ties exist, and modern systems, including schools and the military. To do so, the perspective of examining children in modern society, their backgrounds and mechanisms, and the folklore perspective of exploring the socialization of children and their symbolic position in rural society will be combined, and the cases obtained in the north-east Japan in the early Showa period will be examined.

Here, rather than confronting the local folk culture and the institutions of modern society, the living world in which they both influence each other will be redefined. The diary materials examined here were found during the cultural property rescue after the 2011 Great East Japan Earthquake in the Kogoshio district of Kesenuma City, Miyagi Prefecture. The diary materials were written during the years 1932 and 1933 by a boy in his mid-teens at the time. The analysis of these materials also reveals changes in the local culture of Kesenuma about a century ago and is also linked to the work of extracting the cultural diversity that was lost due to the earthquake and returning it to the local community today.

This study is organized as follows. Section 1 describes the author of the diary, Mr. Eiichi Ogata, and the outline of the diary he left behind. In Section 2, the experiences at school described by Mr. Eiichi will be extracted from the diary, and the school attendance situation and its characteristics will be organized. In Section 3, diary entries about agriculture, which was a livelihood of the Ogata family, will be examined. Section 4 examines how the Ogata family engaged in fishing, which was another family business, as recorded in the diary. Based on the above points, Section 5 will reveal that the fact that Mr. Eiichi controlled and reshaped his own life despite being incorporated into the modern Japanese society through the educational system shows that the change was due to social relationships and the acquisition status of skills in the livelihoods that have been carried out in the local community.

Key words: Diary, Socialization, Child, School Education, Subsistence, Fishery

---